

ホワイトヘッドと汎質論 (panqualitivism)

平田一郎

関西外国語大学英語国際学部

G. ストローソンの論文以来、盛んになってきた汎心論 (panpsychism)を巡る議論に対して、世界の究極的構成物が経験の主体であるとする A. N. ホワイトヘッドのコスモロジーにおける汎経験論 (panexperientialism)的コスモロジーはどのように位置づけられ、どのような意義を持つのであろうか。

世界の究極的実在たる「現実的存在」(actual entity)は経験の主体であるとされる一方で、そういった「汎経験」の活動たる「抱握」(prehension)は「観念的」(conceptual)なもの、「物的」(physical)なものとの双方があらゆる現実的存在にあるとされる。そしてこういった状況を彼自身が心的 (mental) と物的 (physical) の双極性 (bipolar) と称している限り、彼の言う観念的抱握こそが、心的なものを担い、かつ全ての究極的実在の一部として世界に遍在する心的要素であることは間違いない。

この観念的抱握は、「永遠的客体」を対象として抱握する活動とされているのであるが、この永遠的客体は赤や青といった「普遍」がその典型例とされている。即ち何らかの「質」(quality)を現実的存在に内在 (侵入) させることの遍在性を心的要素の遍在性としている限りにおいて、コールマンなどの主張する汎質論 (panqualitivism) の一種と位置づけることが可能かもしれない。もっとも汎質論においてはそれによって主体の遍在性を逃れることで組み合わせ問題の解決にするという意味合いがある一方、ホワイトヘッドは抱握の主体としての現実的存在を主張するのであるが、実はホワイトヘッドは「主体」について、客主構造 (object-subject) という考え方をしており、実在論における中性的素材 (neutral staff) と同じとも言っている限り、それほどの違いはない。

しかし、組み合わせ問題が議論する、そういった遍在する心性とわれわれ人間の通常的心との関係についてホワイトヘッドはむしろ創発 (emergence) によるとする。即ち、人間経験になるような、一部の高等な現実的存在についてのみ、物的、心的を含む諸々の抱握が現実的存在の活動の過程の後期において統合され、意識が創発するという。

また、ホワイトヘッドのテキストにおいては、電子や原子が現実的存在の集まりであるとする表現や、脳髄での微細な物理的生起 (電磁的生起) を現実的存在とするなど、現実的存在を微細な生起と解釈できる表現がある。それゆえホワイトヘッドの通常解釈においては、そういった微細な生起に心的な遍在性がある限りにおいて、現代の汎心論に一般的な日常的な一般的な事物に心を見出すのでなく、微細な生起に心の遍在性があるのだとする現代的な汎心論と軌を一にしているかにも思える。

このようにして、ホワイトヘッドコスモロジーを現代の汎心論における諸々の議論の中に位置づける時、例えば汎質論で問題になる誰も経験したことのない全く新しい質をどう扱うのかといった問題について、端的に神を持ち出すなど興味深い論点もいくつかある。しかしこの発表ではそういったホワイトヘッドの通常解釈によらない、かつて提起されたがほとんど顧みられることのなかった F. B. ウォラックの解釈によって生じる意義や問題を論じてみたい。彼女は微細な生起と共に日常的なマクロな生起、さら

にはより長い時間的スパンのある出来事なども現実的存在と見なせるとしたのである。

ここに現実的存在における心の遍在性を適用するなら、椅子や岩、正確には「今ここに椅子がある」「今ここに岩がある」といった日常的出来事にも心があるという主張になってしまう。そしてこれは現代の汎心論が絶対に主張しないことでもある。実際現代の汎心論は、ミクロ現象的なものゆえに心の遍在性を可能としたからである。

しかし、椅子や岩に心があるということはそれほどおかしなことであろうか。確かにここでの心を「意識」と考える限りそれはありえない。しかし色や匂い、音といった質がマクロな生起に内在するとするならそれほどおかしなことではない。ただしこれらの質の遍在を、われわれは心的な性質の遍在と見なしてよいのであろうか。

それではここで心的な心的たるゆえんを、クオリアの遍在と考えればどうであろう。もっともクオリアはあくまでも「内的な」質の意識であって、岩や椅子が色を担うといった事物が質を担うということと別のことであると見なされるかもしれない。

しかしここでホワイトヘッドがあくまでも世界の究極的実在を生起、出来事としてわれわれがいう事物を複数の生起の継起であるとする考え方が重要なかもしれない。しかもそこでは知覚の時間差論法を介して、外物の知覚と内的な記憶の同質性、外-内の過去-現在への転換によって、内的なクオリアの意識が、「今岩がある」や「今椅子がある」といった生起に遍在するということが論じられる。

しかも通常の意識についても、そういった諸々のクオリアの統合による創発という形でかなり説得的な議論ができ、またそういった人間や高等生物の意識が世界の中でそれほど突出した不自然なものではないということを見出すことができるかもしれない。

本発表ではそういった方向で、ホワイトヘッドの「汎質論」や汎質的なものからの意識の創発といったことの、意義と可能性について考えてみたい。

参考文献

- Basile, P. (2009) "Back to Whitehead? Galen Strawson and the Rediscovery of Panpsychism" in Skribna, D. ed. (2009): 179-199
- Brüntrup, G. & Jaskolla, L. eds. (2017) *Panpsychism: Contemporary Perspectives*, Oxford University Press.
- Chalmers, D., J. (2017) "Panpsychism and Panprotopsyism" in Brüntrup, G. & Jaskolla eds. (2017) pp. 19-47.
- Coleman, S. (2012) "Mental Chemistry: Combination for Panpsychists" *Dialectica* 66.1, pp.137-166.
- (2014) "The Real Combination Problem: Panpsychism, Microsubjects, and Emergence" *Erkenntnis*, 79.1, pp.19-44
- Griffin, D. R. (1998) *Unsnarling the World-Knot: Consciousness, Freedom, and the Mind-Body Problem*, University of California Press.
- Skribna, D. ed. (2009) *Mind that Abides: Panpsychism in the New Millennium*, John Benjamins Publishing Company.
- Wallack, F.B. (1980) *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, State University of New York Press.
- Whitehead, A.N. (1929/1978) *Process and Reality, Corrected edition*, The Free Press.